The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三島文学の英語翻訳における高雅化 ： 『春の雪』の編集過程を鑑みて
Author(s)	寺浦, 麻由
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77042
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三島文学の英語翻訳における高雅化
―『春の雪』の編集過程を鑑みて―

寺浦麻由

1. はじめに

アントニー・ベルマン(Antoine Berman)は粗野な原文の洗練された翻訳文への書き換えに注目し、その現象を高雅化[1]と名付けた。本稿では『春の雪』を事例研究の対象として、ST[2]と TT[3]を比べ、三島文学英語翻訳における高雅化の一端を探る。本稿では Larry(2015)で提供されている編集過程に関する資料を利用し、この先行研究で見落とされていた箇所、議論されていない箇所を補うことを目的とする。論文の構成は次の通りである。1 節で英語翻訳研究の問題点、理論枠組みについて紹介し、2 節では日本文学の英語翻訳の高雅化について概観し、3 節で編集過程における翻訳者のコメントも踏まえながら分析を行う。4 節では、ST と TT の差異などの分析結果をまとめ仮説的な段階ではあるが、三島文学が高雅化される要因について報告する。

1.1 英語翻訳の先行研究の問題点

日本近代文学英語翻訳のマクロ的な研究としては、ヴェヌティ(1998)が、日本文学カノンの英語翻訳について「不可視性[4]」(invisility)の働く滑らかな文に仕上がっていることを指摘し、不可視性の働く逸脱性のない文章は、オリジナルへの暴力(violence)だと批判した。さらに翻訳者の性質が問題に挙がっている。この時代の翻訳はドナルド・キーン、アイヴァン・モリスなどの大学の研究者が担っていた(Fowler,1992)。彼らの文学的な才能や教養が反映された翻訳は均質化(homogenizing)され逸脱性のないものだったと批判されている(Miller,1986)。

また、『春の雪』の英語翻訳に関しては Keen(1972)、Ryan(1974)などで翻訳の質の低さを酷評しているが、本稿では、テクスト分析を行うことで高雅化という観点から ST と TT の差異を確認したい。

『春の雪』の英語翻訳の考察として寺浦(2020a)は『春の雪』の英訳版に挿入された小倉百人一首 48 番、49 番、寺浦(2020b)では藻の表象を中心に和歌の引喩を考察した。しかし『春の雪』に関する網羅的な考察が足りない。Larry(2015)では日本文学英語翻訳におけるアルフレド・クノップフ社の翻訳者と編集者の書簡をまとめた。非常に有益な資料が編纂されたものの、テクスト分析には紙面をさいていない。よって翻訳技法(translation strategies)や歪曲傾向(deforming tendencies)を同定しながらテクスト分析を行う必要があるだろう。本稿では原文に潜む翻訳困難な箇所、SL[5]、TL[6]の愛好表現についても分析した上で、英語翻訳を精査したい。

1.2 理論的枠組み

本節では理論的枠組みを紹介する。ベルマンは否定分析論において歪曲傾向(deforming tendencies)を提唱したBerman(1985/2000)。12ある歪曲傾向の中でも本稿では特に高雅化という視点から英語翻訳を探る。高雅化とは以下のように定義されている。

> Rhetorization[7] consists in producing "elegant" sentences, while utilizing the source text, so to speak, as *raw material*. Thus the ennoblement is only a rewriting, a "stylistic exercise" based on—and at the expense of—the original. This procedure is active in the literary field, but also in the human sciences, where it produces texts that are "readable," "brilliant," rid of their original clumsiness and complexity so as to enhance the "meaning."(Berman,ibid.:246)

---

[1]「高雅化」は「高尚化」と翻訳されることもあるが、『翻訳の倫理学　彼方のものを迎える文学』藤田省一訳を参考にする。
[2]Source text:ST 起点テクスト(原文)
[3]Target text:TT 目標テクスト(翻訳文)
[4]「不可視性」(invisibility) 翻訳者自身が、「流暢な」英語に訳出し、慣用的で「読みやすい」目標テクストを産出する傾向があり、その結果「透明性という幻想」を創出する。マンデイ(2009)『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳参照
[5]Source language:SL 起点言語(本稿では日本語を指す。)
[6]Target language:TL 目標言語(本稿では英語を指す。)
[7]ベルマンは、高雅化を散文の場合 "rhetorization"「修辞化」、詩の場合 "poetization"「詩的美化」とも呼称できると述べている(Berman,ibid.)。

美しく飾り立てる修辞化とは、原典をいわば素材として利用しつつ「洗練された」文を作ることである。美化とはそれゆえ単なる書き直し、原典を元に（そして犠牲に）した「文体練習」以外の何ものでもない。こうした方法は文学の領域で現に行われているものだが、人文諸科学の場合もまた同様であって、「読みやすい」テクスト、「才気に満ち」、「出来栄え見事な」また「文意」を優先し、元々あった「鈍重さ」を拝するテクストがそうした領野でも生み出されている。（ベルマン,2014;60-61）

高雅化は広義では、ぎこちないものを滑らかにし複雑なものをより洗練されたものにする文体練習を指す。そして狭義で卑猥で皮肉を含む表現または口語性の高い表現をより均一的な表現にすることを指す[8]。さらにベルマンは言語多様性に関しても言及し、起点テクストにおける「口頭表現」(oral rhetoric)[9]が破壊され雑然とした「多語性」(polylogy)が破壊されることを批判している。

Nida(1964)はこのような現象について曖昧さ、スラングを避ける過程で、翻訳者があまりにも直接的で複雑な法律文書さながらのメッセージを作り上げることになりかねないと懸念している。下記の【表1】に、ベルマンによる表現を手掛かりに定義を簡略化した。抽象的な定義に起因し研究者によってその定義が異なり幅広い事柄を含めている。

【表 1】

	高雅化	Readable
Complex	→	Brilliant
Clumsy		Meaningful
		Elegant

2. 日本文学と高雅化

2.1 高雅化

本節では高雅化の例を『春の雪』以外のテクストから引用し、日本文学英語翻訳の高雅化について考えたい。高雅化の典型例として言及されるのは『雪国』の以下の部分である(Hasegawa,2012)。

ST(1):もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差し指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えている、はっきり思い出そうと焦ればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の感触で今も濡れていて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのようだと、不思議に思いながら、鼻につけて匂いを嗅いでみたりしていたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはっきりと浮き出たのだった。（川端,1992;7-8)

TT(1):I had been three hours earlier. In his boredom, Shimamura started at his left hand as the forefinger bent and unbent. Only this hand seemed to have a vital and immediate memory of the woman he was going to see. The more he tried to call up a clear picture of her, the more his memory failed him, the farther she faded away, leaving him nothing to catch and hold. In the midst of this uncertainty only the one hand, and in particular the forefinger, even now seemed damp from her touch, seemed to be pulling him back to her from afar. Taken with the strangeness of it, he brought the hand to his face, then quickly drew a line across the misted-over window. A woman's eye floated up before him.(Kawabata,1983;6-7)[10]

---

[8]遠藤周作の『留学』を翻訳したマーク・ウィリアムズは実際に自らが直面せざるを得なかった歪曲について列挙した(William, 2004)。高雅化に関しては、『留学』のサディスティックな描写を犠牲にしたことを述懐した。必要以上に淫ら(coerce)で残酷(crude)な文章を削除することに専念したという。しかしウィリアムズの場合、遠藤自身に相談しどの文章のトーンを和らげるべきかを両者で合意できたという。作者の了承を得ての削除や変更は、大きく性質が異なるだろう。よってこの場合Venuti(1995)のいう原文への暴力(violence)とは言いがたくウィリアムの論文が存在すること自体が翻訳者の可視(visility)に繋がっている。

[9]マンデイ(2009)は、"polylogy"を次のように解説している。精神医学用語では、多弁性"talkativeness"や対話性"dialogism"と同義で用いる場合もある。重要なのは、同一言語内の言語変種を指す。『ドン・キホーテ』では、当時のスペイン語といっても、サンチョパンサの大衆的な慣用表現から、ドン・キホーテの騎士言葉まで用いられている。ベルマンは、このような言語多様性が翻訳では均一化されることに警鐘を鳴らしている。

[10]下線部、強調は筆者による。

「指」から「手」への変化について翻訳者のサイデン・スッテカーは回避し難かったと述べている。[11]これは原文の生々しさをより指摘な表現へと変える高雅化である。

2.2 三島文学の高雅化の例

本小節では三島文学の英語翻訳における高雅化をいくつか取り上げたい。まず『午後の曳航』(1963)の英語翻訳 *The Sailor Who Fell from Grace with the Sea*(1965)からの一例である。横浜で舶来洋品店を営む、未亡人黒田房子の恋人で等航海士の塚崎竜二を息子登が殺害する物語である。以下は息子の登が、母親房子を壁の穴から覗き見する場面である。

ST(2):彼女の肩は海岸線のようになだらかに左右へ下り、頸筋や腕はほのかに日灼けしていたが、胸もとからは、内側から灯したように温かい白さの、薄く膏の乗った、無染の領域が始まっていた。彼女の乳房に至るなだらかな勾配は、急に傲った形になって、双の手がそれを揉むと、葡萄いろの乳首がそむき合った。ひそかに息づいている腹。その妊娠線。(三島,2006;10)

TT(2):Her shoulders, like the shoreline, sloped gently downward. Her haughty breasts inclined sharply away from her body; and when she kneaded them with her hands, the rosy nipples danced apart. He saw the trembling belly. And the scar that meant she had borne children. (Mishima,1988;7-8)

下線部のように“葡萄色”から、“rosy nipples”への色彩語の変化による女性の美化が起こっている。

次に、『絹と明察』から例示したい。本作では、近江絹糸の人権闘争をモデルにし駒沢善次郎社長と従業員のストライキを描いている。この物語の中で岡野は、駒沢社長と敵対する駒沢紡績の経営者と労働者の間で手ぐすねを引き、労働争議を引き起こす。その岡野は芸者の菊乃を軽視している。翻訳者の佐藤(1996)は岡野の発言にみられる女性蔑視を嫌悪している。

ST(3):女にしては広い菊乃の顔(1)に、紅葉の紅い影がうつろうのを、自分のそそり立てた情感のせいだと思うのも億劫だが、今日あたりは嘘っぱち(2)の恋人同士になって、この女を抱き直し(3)てもいいような気がした(三島,2006;74)。

TT(3):That was an uninspiring thing to tell from his past. Okano felt too lazy to ascribe the red reflections of the maples on her brow, which was high for a woman,(1) to the emotions he kindled, but he felt he could again make love to her(3)today, pretending they were lovers(2). (Mishima,1988;54)

佐藤は女性蔑視ともとれる下線部 1 の表現に憤慨している。しかし特に変更は施していない。下線部 2 の「嘘っぱち」は、恋人のふりをしてという訳出がされ、岡野の皮肉を含んだ女性軽視の表現を緩和している。さらに、「抱き直す」という語彙も侮蔑的だが“again make love to her”とより柔和な表現に書き直している。女性蔑視する男性の口ぶりは、登場人物の卑劣な人間性を表す指標となる。女性を軽視した男性の口語性(orality)が均一化された翻訳作品には高雅化が働いているといえる。『金閣寺』から以下のような例もある。モリスは、極力原文の差別的な表現を和らげようと努めた。これも一種の高雅化といえる。

ST(4):妬み深い女は、有為子がおそらくまだ処女であるのに、ああいう人相こそ石女の相だなどと噂した。(三島,1996;13)

TT(4):Uiko was probably still a virgin, but jealous women used to gossip about her and say that her looks betokened a sterile woman.(Mishima,1984;10)

「石女」[12]は、“barren woman”に匹敵するほど辛辣な表現だが、「不妊の女」柔和な表現に緩和されている。さらに、下記のテクストでは、異文化要素に関する高雅化が確認できる。

---

[11] “I was once accused of bowdlerizing because in a most intimate scene I changed a finger to a hand. I couldn't help it. The finger called up many memories of limericks, a heritage in which my author could not possibly have shared.”(Sidensticker,1989:153)下線部「滑稽さ」はこの時代の日本文学 Canon のイメージを阻害する傾向だった可能性がある。

ST(5):「吃りやったの？」と今気づいたように下宿の娘は言った。「ほな三人片輪の二人揃ったわけやな」この言葉ははげしく私を刺し、いたたまれぬ気持にさせた。(三島,1996;155)

TT(5):"Do you stutter?" said the girl to me, as though this was the first time that she had realized it. "Well, well, almost all the deformities are represented today!"Her words struck me violently and made me feel that I could no longer stay where I was. (Mishima,1984;22)

「三人片輪」はある富豪が片輪者(障害者)を雇用するという狂言を由来とする言葉である。富豪の家にやってきた座頭(盲目)、いざり(足が不自由)、おし(聾唖者)の三人が実は片輪者に扮した博打ちだったという喜劇である。下宿の娘が柏木の内翻足、溝口の吃音症を指して、三人片輪のうちの二人は揃ったと嘲笑したのである。片輪は『明鏡国語辞典』によれば「体の一部に障害があって、機能が十分に働かないこと、また、その人をいう、差別的な語」である。狂言をもじり主人公を嘲笑する場面だが TT では "deformities"に訳されて、三人のうちの二人という ST の情報も伝達されていない。ヴィネイ&ダルベルネは訳出における個別の問題に対し翻訳技法をまとめ、異文化要素に対する訳出方法を分類したが、その中の等価(equivalence) [13] にあたるだろう(Vinay,J.-P.&Darbelnet, J.,1995)。例えば、SL が TL に直接転移される借用(borrowing)で *Saninkatawa,deformities* と翻訳しては、ぎこちない(clumsy)翻訳になってしまうのだ。これは、ST の辛辣さを緩和すると同時に、TT の読みやすさを優先する高雅化といえる。

2.3 三島文学と高雅化に関する仮説

本小節では、三島文学を訳出した翻訳者の声を頼りに、高雅化される傾向のある特徴を仮説的に列挙した。佐藤が原文の女性蔑視を高雅化しようとしたことについては、既に、2.1(3)で紹介した。その他の翻訳者のコメントについて紹介したい。高雅化という現象を意識した発言ではないものの、三島文学の翻訳困難な点は、密接に高雅化と関わっているとみられる。Morris(1958)は『金閣寺』の英語翻訳に際し、ST の時点で既に"incomprehensible"であり、論理的な英語に直そうと思えば誤訳は不可避だと述べた。ベスター(1990)は三島の原文から立ち現れてくるイメージをいかに忠実に英語圏の読者に伝達するのかは難題であると述べた。三島の「独創的で、美しくても、唐突」なメタファーが訳し方によっては文脈上、不自然な可能性がある文章の流れを邪魔しない程度のものにする必要があると述べている。『宴のあと』を翻訳したドナルド・キーンは何度も原文に「媚態」という語彙が登場するために、英訳用の違う語彙を用意するよう三島に頼んだことがあるという(キーン,2013)。【表 2】に翻訳者、翻訳者の訳した三島作品、翻訳に際して触れた三島文学翻訳の難解さを記した。これらの指摘は、本稿の分析でも有益であるため適宜取り上げたい。

【表 2】三島文学と高雅化の要因

翻訳者	代表作	三島の文体に対する表現の中で高雅化され得る特徴
a.佐藤宏彰	『絹と明察』	女性蔑視
b.アイヴァン・モリス	『金閣寺』	不可解な原文
c.ジョン・ベスター	『太陽と鉄』	独創的で美しくも唐突なメタファー、英語に訳せば滑稽になるメタファー
e.ドナルド・キーン	『宴のあと』	同一語の繰り返し

[12]「石女」(p.12)«бесплодные женщины - ледышки»(p.48)「石女」という言葉は嫉み深い女が有為子の陰口として言ったとされる言葉で、子供 を産めない女という意味であり、蔑視のニュアンスを含む。露訳では「子供を産めない女」に«ледышка»(冷たい人、冷淡な人)という言葉を付け加えることで、有為子に対する悪意を強調している (エカテリーナ,2010; 134)。

[13]翻訳技法に対する訳語はマンデイ(2009)を参照した。

3 分析

本節では、『春の雪』の英語翻訳の分析にうつる。3.1 であらすじを紹介し、3.2 では分析方法について概略する。

3.1 あらすじ

分析に移る前に簡単に『春の雪』のあらすじを説明したい。舞台は、大正時代急成長した地方出身武士の息子、清顕と公家である綾蔵伯爵家の令嬢、聡子の悲恋を描いている。清顕は、公家が有する礼儀を身につけるため、幼少期に綾倉家に預けられた。綾倉家で教育されてきた清顕は、聡子に恋心を抱く。しかし清顕は年上で美しい聡子の余裕を嫌悪し、聡子の言動を穿った目でみる。一方聡子も清顕への思慕を抱き続けているのだが、その想いを秘めたまま、思わせぶりな行動で清顕を不安に陥れる。ある日の春の朝、聡子は雪見に清顕を誘う。その幌の中で初めて接吻を交わすのだった。清顕は復讐を兼ねて聡子が数多の女性のうちの一人で、女を知ってしまったと告げる虚偽の手紙を出す。しかし清顕は、その手紙を火中するように頼む。手紙を聡子が読んだのか否か気掛かりで仕方ない清顕の緊張で幌が満たされる。この雪見を契機に幼い頃からの想いを告げた二人は秘密の逢引を始める。二十歳を過ぎても清顕への想いを持ち続けていた聡子は、縁談を断っていたが、聡子に宮家との婚姻勅許が下る。ついに清顕は勅許で「不可能の恋人」となった聡子と一夜を共にする。しかし聡子が懐妊したことで、その事実が両家に知れてしまう。聡子は堕胎の後、月修寺で出家を決意する。一方、清顕は聡子を訪ねて面会を試みるが失敗に終わる。春の雪が降りしきるなか聡子を待ちぼうけ、清顕は二十歳でこの世を去る。

3.2 分析方法

本小節では『春の雪』にみられる高雅化を列挙する。特に清顕と聡子は初めて接吻を交わす象徴的な 12 章、27 章の ST・TT 間差異を分析することを中心とする。前述したように適宜、Larry(2015)におけるアルフレッド・クノップフ社編集者の訂正、校閲者 Iwasaki Haruko 氏、翻訳者のコメンタリーを引用し、その翻訳過程についても言及する。【表 3】にテキスト引用の際の記号を示す。なお、校閲者 Iwasaki Haruko 氏は、「正しくない」箇所には“n.c”(not correct)「原文にない」箇所には“n.o”(not in original)と記載した。編集者、翻訳者のコメントが現存する実際の編集過程を確認できるテクストの分析を行うことで、高雅化がどのタイミングで生じたかについても分析したい。

【表 3】記号について

記号	記号の意味
TT.G(Gallagher)	翻訳者マイケル・ギャラガーによる翻訳
TT.E(Editor)	アルフレッド・クノップ社の編集者による編集が施された翻訳
TT.I(Iwasaki)	Iwasaki Haruko 氏の編集が施された翻訳
TT	出版された翻訳文

前述したように高雅化の定義が曖昧で研究者によってその認識が異なる。筆者は高雅化の根拠を示すことでその混乱を避けたい。必要に応じて高雅化と同時に生じている 12 の歪曲傾向(Berman,ibid.)、翻訳技法(translation strategies)を同定し、さらにメタファーの分析に関しては Newmark(1998)[14]の分類を利用する。

(1)聡子の身体描写

清顕が登校の用意をしていた朝、突然聡子に誘われて雪見に向かう。聡子が雪見の幌に乗り込む際の身体描写がTTでは大きく異なる。以下は翻訳者による女性の美化であり、典型的な高雅化といえるだろう。尚、(1)に対しコメントは存在しないが高雅化の一例であるため分析したい。

ST(1):[1]それはころがり込んで来た紫の堆積であり、たきしめた香の薫りもして、清顕には、自分の冷えきった頬のまわりに舞う雪が、俄かに薫りを放ったように思われた。[2]乗るときの勢い

[14]Newmark(ibid,;88-91)は、メタファーの翻訳方法として 1)Reproducing the same image in the TL. 2)replace the image in the SL with a standard TL image 3)Translation of metaphor by simile 4)Translation of metaphor or simile plus sense 5)Conversion of metaphor to sense 6)Deletion 7)Same metaphor combined with sense.をまとめた。

で、聡子の頬は清顕のすぐ近くまで来すぎ、あわてて身を立て直した彼女の瞬間の頸筋の強ばり(1)がよくわかった。[3]それが白い水鳥の首のしこり(2)のようだった。(110)

TT(1):[1]The sudden lurching of the light vehicle as Satoko climbed up doubtless strengthened this impression, as did the tumbled purple folds of her robe lying heaped beside him, and her heady perfume, whose fragrance seemed to draw the very snowflakes that swirled in, making them strike against his cold cheeks.[2]As Satoko got into the rickshaw, her momentum carried her cheek close to Kiyoaki's for a second, and when she pulled her head back, disconcerted, to straighten up, Kiyoaki was caught by the supple strength of her neck(1). [3]It made him think of the smooth, white neck of a swan.(2)(86)

容姿端麗な聡子に不似合いな直喩の媒体「しこり」は排除された。TT[3]では「滑らかで白鳥の首を思わせる(拙訳)」と聡子の優雅な人物像を固守した。ST 下線部(1)「頸筋の強ばり」は「水鳥の首のしこり」に喩えられて聡子が清顕に接近しないよう身を正す女性としての自尊心が「しこり」の一語に象徴される。しかし TT 下線部(1)に示したように、形容詞“supple”(『ジーニアス英和辞典』の定義では「しなやかな」)でフェミニンな女性像を形成している。さらに、TT 下線部(2)では、むしろ“tense”と翻訳すべきところに“smooth”を用いた。これでは聡子が身を正して硬直した前文“As Satoko got into the rickshaw, her momentum carried her cheek close to Kiyoaki's for a second, and when she pulled her head back, disconcerted, to straighten up,…”との整合性がない。引用した ST では余裕を有していた聡子が身を強張らせることに意外性がある。換言すれば、聡子が覆い隠せなかった緊張が「強張り」「しこり」に象徴されている。突発的な思いつきで歓喜しているように装い動揺を隠そうとするが、それに失敗するを描写した直喩を全くの反義語で訳出することは高雅化と呼称できるだろう。

また上位語(superordinate)「水鳥」が必ずしもその下位語(hyponym) の一つである“swan”「白鳥」とは限らない。しかし翻訳者の判断で、白い水鳥の中でも美しさを喚起する白鳥が選択された。Newmark(ibid.)のメタファー翻訳の分類においては 2.replace the image in the SL with a standard TL image に近い。近いというのも、目標文化内でより女性美を想起させる“swan”に置き換えたものの SL のイメージを完全には置き換えていないからだ。ST には存在しない特定化されたイメージが付与されたことになる。あえて、翻訳文を擁護してみたい。白鳥は聡子の美しさの一側面を表すには恰好の対象である。なぜならば、目標文化ではギリシア神話の「レダと白鳥」【画像 1】におけるモチーフにおける美と官能性が思い浮かぶからだ。さらに、第 42 章の清顕と最後の別れを告げる場面で聡子は、「白鳥」(383)に喩えられていることにも留意したい。翻訳者は第 42 章との一貫性(cohesion)を目指した可能性もある。曖昧さを嫌う TL で包括的な語句 Waterfowl(水辺の鳥)[15]を用いることは結果的にこの直喩を不自然にする可能性があっただろう。

次にそもそも「水鳥」「しこり」という不自然な語彙をなぜ使用したのかを考える。三島は音韻効果を優先させるため「り音」の含まれる「mizudori」「shikori」を使用したのではないだろうか。なぜなら、(1)の ST わずか三文に「り音」が 8 回認められるからである。流音である「り」音の同音反復[16]を利用し 12 章全体に流れる降雪と馬車のリズムを模倣したと考えられる。

【画像 1】レダと白鳥(作:チェザーレ・ダ・セスト現存していないレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画の模写)

[15]A bird, which is typically, found in or near water, (in later use often) *spec.* any of the larger kinds of swimming birds, esp. those regarded as game. Now chiefly: ducks, geese, and swans considered as a class.(*OED*)"geese" ,"ducks"は必ずしも美しいとは言い難い。そのような俗なメタファーの媒体は、避けられるべきだと考えたのだろう。

[16]同一の音の反復で、快い効果を生む場合と、耳障りな場合がある(佐藤,1996;76)。

(2)美しさ

接吻をした清顕はなにもかも忘れ歓喜すべき状況においても自分の美しさを忘れていなかった。TT(2)では、男性主人公の清顕に対し“beauty”ではなく“good looks”を使用したことが問題となっている。[17]第 1 章からも次のように頑なに “beautiful”を使わない姿勢が感じられる。「十三歳の清顕は美しすぎた。」(14) “At thirteen, Kiyoaki was altogether too handsome.”(10)

ST(2):そのとき清顕はたしかに忘我を知ったが、さりとて自分の美しさ(1)を忘れていたわけではない。自分の美しさ(2)と聡子の美しさ(3)が公平に等しなみに眺められる地点からは、きっとこのとき互いの美が水銀のように融け合うのが見られたにちがいない…(113)。

TT.G:(2)Kiyoaki at that moment, though plunged into self-forgetfulness, was still keenly aware of his own beauty(1):His beauty(2) and Satoko's beauty(3):he saw that precisely this fine correspondence between the two dissolved all constraint and allowed them to run together…(Larry,2015;189)

TT:(2)At that instant, although totally engrossed, he was still keenly aware of his own good looks(1) Satoko's beauty(2)and his(3): he saw that it was precisely this fine correspondence between the two that dissolved all constraint and allowed them to flow together, merging as easily as measures of quicksilver. (88)

ギャラガーは、アルフレッド・クノップ社に対する書簡に ST を手書きで写し、その中の「美しさ」を四角く囲み三回反復されることを強調した。そして、反復法(repetition)[18]が、TT でも同様に再現されるべきだったと主張した。ここで“beautiful”, “good looking”の定義を確認したい。*Longman Language Activator* には、BEAUTIFUL という大項目が見つかる。大項目の下位区分のなかには、美しいを用いる時に、〈子供〉〈もの〉に使用する場合のニュアンスなどを解説している。〈WOMAN〉の項目には“beautiful use this about a woman who is extremely attractive in a way that is fairly unusual and special, so that people notice and admire her.”〈MAN〉の項目には、下位区分にまず“good looking”が記載され“beautiful”は記載されていない。“good looking”は、“use this about a man who is nice to look at but in a fairly ordinary way.” と男性に用いることが示されている。“good looking”と “beautiful”における *Oxford English Dictionary* (*OED*)、『新英和大辞典』『ジーニアス英和辞典』の定義を以下の表にまとめた。

【表 4】 good looking と beautiful の意味比較

	good looking	beautiful
OED	Of a person: of good or pleasing appearance; (now usually) physically attractive, esp. having a beautiful face. Cf. well-looking adj. 1	b.*spec.* Of a person (now esp. a woman), the face, figure, etc.: possessing attractive harmony of features, figure, or complexion; exceptionally graceful, elegant, or charming in appearance.
新英和大辞典	1a 器量[顔立ち]のよい、美しい、美形の 1b 善良[有徳]そうな	1 美しい、美麗な、きれいな〈cf.pretty〉
ジーニアス英和辞典	〈人が〉顔立ちのよい、美しい;〈男が〉ハンサムな《◆beautiful よりは劣る》	1.美しい,きれいな;(心・感覚などを)楽しませる

OED の“beautiful”は特に女性に用いられることが明記されジーニアスの“good-looking”の項には、ハンサムな男の容姿を修飾することが記載されている。目標志向的(target-oriented)な編集者が校閲

[17]『金閣寺』でも同様の問題が立ち上がったが男性主人公には“handsome”が適用されていた。 Examples of items they discussed ranged from simple items such as changing *utsukushikatta* from “beautiful” to “handsome” as it referred to a male character…(Larry,2015)

[18]瀬戸(2002)によれば反復法(repetition)は、同じ表現を繰り返すことによって、意味の連続、リズム、強調を表す語、リズム、強調を表す法。

段階で辞書的な意味を優先させ、”good looks”を用いたと考えられる。ギャラガーは、のちに編集社にあてた手紙に“If Mishima meant good looks, he would have written good looks and not beauty. Why was this insane substitution made? A reluctance to assign beauty to a male? Or a desire to avoid repetition -that great Knopf Bugaboo? Well, for anyone who has any sense of sentence rhythm, it's obvious that the repetition is for effect. And it's in Japanese.(Larry,2015;189) と不満をしたためた。

注目すべきは、ギャラガーが反復法(repetition)に注目し、原文の音韻効果を残そうとしたことだ。反復を嫌う英語に対し、起点志向(target-oriented)で翻訳に挑もうとしている。前述したようにキーン(ibid.)も同じ問題に直面している。【図 1】には、翻訳者ではなく、編集者が原文にあった「不自然さ」を自然に高雅化したこと図示した。

【図 1】高雅化のタイミング

			高雅化
作者	→ 翻訳者	→	編集者

引用部分のメタファーでは、清顕と聡子の美が、流動的な光沢のある元素が難なく融解するように、お互いの美が一体となる。同質の物質が融解するメタファーの性質上、水銀に喩えられた清顕、聡子の美に同様の “beauty”という語彙が使用されるべきである。

(3)聡子の化粧

清顕は薄暗い幌の中で聡子を眺める。聡子の唇が暗く照り輝いて見える。

ST(3):[1]一つの雪片がとびこんで清顕の眉に宿った。[2]聡子がそれを認めて「あら」と言ったとき、聡子へ思わず顔を向けた清顕は、自分の瞼に伝わる冷たさに気づいた。[3]聡子が急に目を閉じた。[4]清顕はその目を閉じた顔に直面した。[5]京紅の唇だけが暗い照りを示して(1)、顔は、丁度爪先で弾いた花が揺れるように(2)、輪郭を乱して揺れていた。(112-113)

TT.G(3):[1]One of the snowflakes that blew in lodged itself upon Kiyoaki’s eyebrow. [2]Satoko gave a little cry at this, and Kiyoaki turned towards her without thinking even as he felt a cold trickle upon his eyelid. [3]Satoko shut her eyes abruptly, leaving Kiyoaki thus face to face with her. [4]Her makeup was as tasteful as ever, her lips a subdued crimson in the shadow(1). [5]And because of the swaying rickshaw, her features, like the details of a blossom held between trembling thumb and forefinger, were softly indistinct. (2) (Larry,2015;189)

TT.I(3):[1]One of the snowflakes that blew in lodged itself upon Kiyoaki’s eyebrow. [2]Satoko gave a little cry at this, and Kiyoaki turned towards her without thinking even as he felt a cold trickle upon his eyelid. Satoko shut her eyes abruptly, leaving Kiyoaki thus face to face with her. Her makeup was as tasteful as ever (Not in O), her lips a subdued crimson in the shadow(1). [3]And because of the swaying rickshaw, her lips a subdued crimson in the shadow, And because of the swaying rickshaw, her features, like ~~the details of~~ a blossom ~~trembling thumb and forefinger~~(at a playful fingertip), (2) were softly indistinct.(Larry,2015;189)

TT(3):[1]One of the snowflakes blew in and lodged itself on Kiyoaki’s eyebrow. [2]It made Satoko cry out, and without thinking, Kiyoaki turned toward her as he felt a cold trickle on his eyelid. [3]She closed her eyes abruptly. [4]Kiyoaki stared at the face with its closed lids; only the subdued crimson of her lips glowed in the shadows(1),and because of the swaying of the rickshaw, her features, like a flower held between trembling fingertips(2),were softly blurred.(88)

(3-1)暗い照り

まず、下線部 1 から考察しよう。TT.I[2]網掛け部分に対して Iwasaki Haruko 氏は“Gallagher’s invention Not in O”と書き加えている(Larry,2015;189)。網掛け部分を逆訳すると「彼女の化粧は今までにないほど、趣があった。(拙訳)」となる。これは明確化(clarification)[19]と呼べる。聡子の口紅が示した「暗

[19] Berman(ibid.)によれば「明確化」とは、作者が明確にされたくないことまで明確にすることである。

い照り」は、撞着語法(oxymoron)[20]である。瀬戸(2002)が「反対物の一致」と呼ぶ技法を用い闇と光の攻防を感じさせるようなレトリックで京紅を描写している。しかし下線部(1)の「暗い」〈形容詞〉＋「照り」〈名詞〉は、TT では「暗闇の中で光る」glowed〈動詞〉＋in the shadow〈前置詞句〉へと変更された。こうした翻訳技法の中では、文構造を TL において自然なものに変換する調整(modulation)にあたる(Vinay,J.-P.&Darbelnet, J.,1995)。

次に「京紅の口紅」の翻訳について考察したい。「京紅の唇」は TT.G の時点から“subdued crimson”と訳された。ST では明暗のみが示されていたが色彩語 “crimson”を形容詞“subdued”で修飾した形で訳したのは興味深い。『日本国語大辞典』によれば京紅は上品な色で名高いという。よって「色味を抑えた紅」という翻訳は適切である。“crimson”[21]は *OED* によれば「血なまぐさい赤」を意味するという。天皇を裏切る罪深い恋を連想させるような “crimson”、さらに後述する TT(4) “confines”[22]の使用は月修寺の聡子を連想させるような名訳である。

(3-2)爪先

次に下線部 2 を考察したい。聡子の紅だけ浮かび上がり顔の輪郭は俥の振動で曖昧にぼやける。直喩「爪先で弾いた花が揺れるように」は TT.G で「親指と人差し指の間で揺れる」、TT.I「戯れの指先に揺れる」、TT「指先に摘まれて揺れる」と変更された。「爪先(つまさき)」という語彙が翻訳者を悩ませたと考えられる。爪先は、本来足先を指すが仮に“toes”などと訳出すれば滑稽に聞こえてしまう。立った状態で下方の花を足先で蹴ったと考えるのは不自然なようにも思える。この直喩は前述したベスター(ibid.)の英語に訳すと滑稽に聞こえるメタファーにあたる。また、Morris(ibid.)が ST 自体不可解だと述べていたことも理解できる。

(3-3)文構造の合理化

次に ST[5]の文構造について考えたい。前田(2006)は、前文脈から続くトピックに固執し TT でトピックを変えようとしない英語の「トピック密着」に注目している。ST[5]には幌の揺れに言及していないが TT.G で「幌の揺れ」というトピックに密着している。さらに TT[5]には、聡子の化粧が揺れる現象の原因が、網掛け部分“and because of the swaying of the rickshaw”と示されている。もう「幌の揺れ」の話題は終了しているが、そのトピックをもう一度利用している。ST を「原因から結果」という整理された文体に高雅化していることがわかる。よって、高雅化に伴い合理化(rationalization)も引き起こされているといえるだろう。

(4)幌の描写

清顕の緊張は幌の揺れとともに増幅する。清顕は雪見の前、遊女を知った今、聡子もその女の一人だと侮蔑した手紙を出す。しかしその手紙を読んだか否か定かではない。手紙を読んでいないということは「女を知らない男として嬲っているのではないか」(112)という疑念に駆られる。そして一度火中するよう依頼したものの、「女を知った男」として書いた手紙に目を通してくれていた方が好都合だったとまで後悔し始めるのだ。

ST(4):[1]<u>黒い小さな四角い闇(1)</u>の動揺は、彼の考えをあちこちに飛び散らせ、聡子から目をそむけていようにも、明かり窓の小さな黄ばんだセルロイドを占める雪のほかには、目の向けどころがなかった。[2]彼はとうとう手を膝掛けの下へ入れた。[3]<u>そこでは、温かい巣の中で待っていた狡さ(2)</u>をこめて、聡子の手が待っていた。(112)

TT(4):[1]Kiyoaki’s thoughts twisted and turned as he sat in <u>the small, dark, square confines(1)</u> of the swaying rickshaw. [2] Since he would not look at Satoko, there was nothing else to do but stare out at the snow, flashing brightly through the narrow window of yellow celluloid. [3] Finally, however, he put his

[20] *OED* で“oxymoron”n.1 は“Rhetoric. A figure of speech in which a pair of opposed or markedly contradictory terms are placed in conjunction for emphasis.”と定義されている。

[21] 2.*figurative*. Of or relating to blood; sanguinary. Also: suffused with blood; blushing.

[22]『ジーニアス英和辞典』の confine.n2 には《古・詩》幽閉《古・詩》幽閉場所、牢獄(prison)と記載されている。

hand under the blanket, where Satoko's was waiting, already in possession of the one warm, narrow refuge available. (2) (88)

(4-1)黒い小さな四角い闇の動揺

下線部 1 幌の振動を指す「黒い小さな四角い闇の動揺」において形容詞「黒い」は削除され、名詞「闇」は、"confine"を"small"と"square"を並列して修飾する"dark"という形容詞になっている。原文の「黒い」「闇」は冗長的だと判断されたのか"dark"一語に集約されている。翻訳者は、ST「黒い」「暗い」の言語使用を作家のこだわりだと判断し、忠実に準拠した。しかし編集者に校正されてしまったと述懐している(Larry,ibid;275)。これは ST の冗長語を整理する高雅化だといえる。また調整(modulation)(Vinay,J.-P.&Darbelnet, J.,1995)の翻訳技法が用いられている。

(4-2)温かい巣の中で待っていた狡さ

ST[3]「そこでは、温かい巣の中で待っていた狡さをこめて聡子の手が待っていた。」は TT[3]で同様の隠喩という形式を使用したが "already in possession of the one warm, narrow refuge available."になっている。逆訳すれば「すでに、恰好の暖かく狭く隠れ家を用意していた。」となる[23]。平然とした聡子を「狡い」と訝る清顕の心情は訳出されていない。清顕が持参した膝掛けの下で狡猾に獲物を捕らえるように、聡子はぬくぬくと待っていたのだ。清顕の神経質な妄想ともいえる描写は削除され、柔和な表現になっている。この変更は、聡子の性格を美化し、清顕の誇大妄想が凡庸化されてしまう高雅化といえる。

さらに、前述 2.2 で紹介したベスター(ibid.)のように「巣」を訳出した場合の滑稽さを恐れた可能性がある。しかし聡子は、「みだらな肉を持った小動物」(67)で、幌の中で「聡子が身を庇う機敏さは、小車を廻す栗鼠の廻転のような」(299)のである。つまり聡子は栗鼠のような小動物の比喩で形容されるのだ。よって一見滑稽な ST の隠喩にも作家の意図が表れ言語体系性があることは確かだ。

さて、この隠喩は Newmark(ibid.)のメタファー翻訳の分類のどれに当てはまるだろうか。「巣」の意味要素である「動物のすみか」を "refuge"(隠れ家)で翻訳したと考えれば 5) conversion of metaphor to sense に分類できるだろう。

(5)聡子の手紙

聡子から雪見の喜びを赤裸々にしたためた手紙が届く。優雅を残しながらも、見事に織り込まれた官能的な表現に自らの稚拙な優雅との差を思い知らされるのだった。彼女の手紙は、優雅は淫らさをも乗り越えることを記載した教本のようだった。

ST(5):読みおわったときは、読む者を有頂天にさせる手紙だと思われたが、しばらくしてみると、彼女の優雅の学校の教科書のような気がしだした。聡子は清顕に、真の優雅は、どんなみだらさをも怖れないということを教えているように思われたのである。(140)

TT.G:When he had reflected a bit, however, Kiyoaki's mood altered. He now felt that the letter was a sort of text meant to spur his education in Satoko's school of elegance. Her intention, he thought, was to give him an object lesson that true elegance knows no shame, however compromising the circumstances.(Larry,ibid.190)

TT.I(5):When he had reflected a bit, however, Kiyoaki's mood altered. He now felt that the letter was a sort of text meant to spur his education in Satoko's school of elegance. Her intention, he thought, was to give him an object lesson that true elegance (knows no shame, however ~~compromising the circumstances.~~(n.c) (dares any wantonness) [24](Larry,ibid;190)

TT.E(5):On reflection, however, it seemed more of a textbook exercise from Satoko's classes in the art of elegance. He felt she wanted to teach and that such an art overrides any question of decency.

---

23 大森文子教授に "the one"の解釈についてご教示いただきました。

24 取り消し線、括弧は、Iwasaki Haruko 氏によるものである。

TT(5):After he had read it,his immediate reaction was that it was the kind of letter that ought to transport a man into ecstasy. On reflection, however, it seemed more of a textbook exercise from Satoko's classes in the art of elegance. He felt she wanted to teach him that elegance overrides any question of indecency.(109)

TT.G でギャラガーは「みだらさ」を訳出するのを避け「真の優雅は恥を知らないがどんな状況をも和解させる」と訳した。Iwasaki Haruko 氏は、括弧内を正しくない(not correct,n.c.)と表記し、TT.I「どんなみだらさも、ものともしない」と修正されている。さらに TT.E では「この教義は良識に関するどんな問題をも無碍にする」TT では「優雅は、どんな淫らさに関する問題をも無碍にする」と変更された。注目すべきはギャラガーが訳出しなかった ST の「みだらさ」という語彙は「洗練された」翻訳文において不都合を引き起こすため、当初は削除されていたことである。ギャラガーが施した高雅化を、校閲者が訂正した過程を図示した(【図 2】)。

【図 2】高雅化のタイミング

		高雅化		~~高雅化~~		
作者	→	翻訳者	→	校正者	→	編集者

(6)聡子の腿

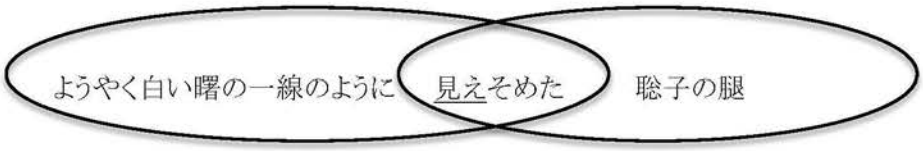
第 27 章で聡子は清顕に半ば強引に見初められる。女の着物の解き方を知らない清顕は、聡子の着物の裾から、やっと垣間見えた腿を曙の一線に重ねる。編集段階で TT.G「聡子の腿、それは暁の地平線の仄かな一線のように今こそ光り」から TT「仄暗い地平線の微かな輝きを有する聡子の腿」と編集された。下記引用箇所の直前、清顕は聡子をみそめれば、悲しみの世界を脱し、「完全無欠な曙が漲る」(230)はずだと期待している。

ST(6):ようやく白い曙の一線のように見えそめた聡子の腿に、清顕の体が近づいたときに、聡子の手が、やさしく下りてきてそれを支えた。この恵みが仇になって、彼は曙の一線にさえ、触れるか触れぬかに終わってしまった。(233)

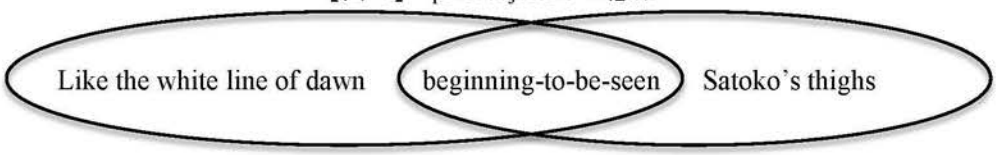
TT.G(6):Finally, however at the time that Kiyoaki's body was drawing it closer to Satoko's,whose thighs now glowed like the pale line of the dawn horizon, when she raised her hands and gently supported him, an unfortunate reaction. For just at a point when he was not sure whether he had merged himself with the dawn or not, all of Kiyoaki's effort came to an abrupt occlusion. (Larry, ibid.;284)

TT(6):Finally, however, he was drawing closer to her body, slowly lowering himself onto her thighs, which had the faint sheen of a pale dawn horizon, when she raised her hands and gently helped him; this intended kindness ruined the moment, for at the instant when he merged with the dawn, whether he was touching her or not, it all ended abruptly.(190)

ギャラガーは"The Japanese says "misomeru", beginning to be seen," which is, I think, a pivot adjective that looks back to the dawn and looks ahead to Satoko's legs.(Larry,ibid.;284)と「見えそめる」についてコメントしている。下線部 pivot word とはどういう意味だろうか。「見えそめた」のは曙という媒体(vehicle)、そしてその主意(tenor)である聡子の腿でもある。よって、一種の「中心軸のある形容詞」"pivot adjective"だと主張している。【図 3】で示したように、「見えそめた」を中心軸として前(look ahead)後(look back)を眺める軸回転のイメージで捉えている。字義通りに翻訳すれば "Like the white line of the dawn beginning-to-be-seen Satoko's thighs" となると主張した。つまり【図 4】のように、ST 同様、"beginning-to-be-seen"を中心軸として曙の一線と聡子の腿両者を前後に修飾する文構造で訳せば、媒体と主旨を滑らかに繋ぐ "pivot adjective"が再現できるのだ。



【図 3】“pivot adjective”の意味[25]



【図 4】翻訳者の理想的な訳出

原文では主体の「見る」知覚行為を削除しているため、ギャラガーが主張するような “pivot adjective”は消滅している。直喩を隠喩的に訳し、下線部 1 のように関係代名詞で“her thighs”を修飾している。さて、重要なのは曙色(『デジタル大辞泉』によれば、「黄みを帯びた淡紅色」)と聡子の腿の色彩と光沢の視覚類似性を越えて共通点があることだ。遊び女との関係も退けて聡子とだけ結ばれたいと願った清顕が「腿」を見た喜びと、聡子の喪失という夜が開け、新しく事態が展開し「曙」が見た喜びが、「見えそめた」を軸として結合されているのだ。さらに、作品内で、時間の経過つまり勅許、納采、出家など不可避な時の迫りに支配された聡子は「曙」がつきまとう。出家後の聡子が有する「曙」は実の母親も触れられぬ畏敬の念を抱く光として描かれている。[26]清顕も曙に触れられない。「曙の一線」との接触が失敗に終わることは勅許によって結ばれ、引き裂かれる清顕と聡子の帰結を如実に物語っている。

高雅化について話を戻そう。(6)は三島の唐突なメタファーの複雑さを TT で緩和する高雅化だと考えられる(1.2 【表 1】において「複雑さ」も高雅化の対象となっていた)。ギャラガーは、原文の複雑さをそのまま移植しようとしていた。すなわち、ST の直喩の複雑さを凡庸化したのは編集者といえる(【図 5】)。

【図 5】高雅化のタイミング

				高雅化
作者	→	翻訳者	→	編集者

4. 結論

本稿では『春の雪』における高雅化について考察した。本節では 4.1 で ST・TT の差異を改めて概観し、三島の文体における高雅化の要因についてまとめ、4.2 で今後の課題を提示する。

4.1 分析結果

本小節では、分析結果を下記の表にまとめた。特に、清顕と聡子の感情に注目しその表現にどのような差異が認められるのかに注目すると、その差は小さいとは言えない。清顕の屈折した自尊心と、聡子の強固な優雅の狭間に緊張関係が存在する。二人の恋は一般的な男女の熱愛とは言い難い。その心象の機微は高雅化を伴い、翻訳版では歪曲されている箇所もあった。また、本稿では高雅化を施したのが編集者である場合と翻訳者である場合があることを明らかにした。

【表 5】ST・TT の表現と高雅化の要因

番号	ST の表現/特徴	TT の表現/特徴	高雅化の要因
(1)聡子の身体描写	白い水鳥のしこり/首のこわばりを表す	the smooth, white neck of a swan./滑らかさを表す	聡子のイメージに不似合いな語の使用
(2)美しさ	美しさ/清顕に対して、美しさを使用、反復法	good looking, good looks/男性を形容する際のより一般的な語の	男性を形容する語彙の不自然さ

[25] 大森文子教授より“pivot adjective”の解釈について図と共に私信にてご教授をいただきました。また、視覚類似性のみならず、清顕の心情と深い関わりがあることについてご教示いただきました。

[26]「...その瞳には小さく蝋燭の焔が揺れ ているのに、その目の白いところには、暁の白光がすでに映っていた。夫人は娘の目の中から、射し出したこのような怖ろしい曙を見たことはない。聡子が指にからませている水晶の数珠の一顆一顆も、聡子の目の裡と同じ白みゆく光りを宿し、これらの意志の極みに意志を失ったような幾多のすずしい顆粒の一つ一つから一せいに曙がにじみ出ていた。」(395-396)(聡子と時の迫りの関係性について詳しくは寺浦(2019a)を参照されたい。)

		使用、同一語を繰り返さない	反復法を避けるため
(3−1)聡子の化粧	暗い照り/オクシモロン	glowed in the shadow/論理的な表現に変更	不自然な語彙
(3−2)	爪先/滑稽な語彙	fingertip/指先に変更	不可解な原文 滑稽な語彙
(3-3)	京紅の唇だけが暗い照りを示して、顔は、丁度爪先で弾いた花が揺れるように、輪郭を乱して揺れていた。/不可解な原文構造	Kiyoaki stared at the face with its closed lids; only the subdued crimson of her lips glowed in the shadows,and because of the swaying of the rickshaw, her features, like a flower held between trembling fingertips,were softly blurred	不可解な原文構造
(4−1)幌の描写	黒い、小さな、四角い闇/冗長な語彙	the small, dark, square confines/「黒い」を削除、調整	冗長な語彙 なメタファー
(4−2)	温かい巣の中で待っていた狡さを込めて/滑稽なメタファー	already in possession of the one warm, narrow refuge available. /「巣」「鋭さ」を削除	滑稽なメタファー 聡子のイメージに不似合いな語の使用
(5)聡子の手紙	どんなみだらさをも怖れない/聡子に対し「みだらさ」という語彙を使用	compromise the circumstances/「みだらさ」という語彙の削除(出版段階で変更)	聡子のイメージに不似合いな語の使用
(6)聡子の腿	ようやく白い曙の一線のように見えそめた聡子の腿/「見えそめた」という“pivot word”の使用”	her thighs, which had the faint sheen of a pale dawn horizon whose thighs now glowed like the pale line of the dawn horizon	複雑なメタファー

(1)(5)(4-2)では高雅化が聡子の人物像の解釈にまで影響を及ぼしている。(1)の場合 TT から聡子の緊張が削除され、(5)は編集前、翻訳者は当初柔和な表現を選択し女性主人公のイメージを柔和にとどめていた。(4-2)では聡子の狡猾さが伝わらない。佐藤(ibid.)が述べていた女性蔑視とは性質が異なるもの、女性登場人物の描写を美化する傾向が『春の雪』にも認められた。ベスター(ibid.)が唐突なメタファーを訳した際に英語だと滑稽に聞こえる場合があると述べたが、(1)(4-2)は英語訳にすれば滑稽になるかもしれない。さらに、(3-3)で考察したように「ぎこちない」“clumsy”(Berman,ibid.) STの文構造をより読みやすくする高雅化も認められた。さらに(1)(4-2)(5)(6)に関しては聡子に対する清顕の心情が高雅化の過程で柔和になっている。

ここまで考察してきた結果、三島文学の英語翻訳の 3 つの過程で高雅化が起こると仮定できる。

Ⅰ 三島のレトリック表現(反復法、オクシモロン、冗長語)をより均一化する過程
Ⅱ 登場人物の肯定的なイメージを維持しようとする過程
Ⅲ 滑稽な語彙、メタファーを、より洗練された英語に訳す過程

三島文学と高雅化の関係性は考察の途中段階であるが、上記の 3 つのような状況下で高雅化が誘発されることを想定し、さらに分析を進めたい。

4.2 終わりに

本稿では『春の雪』の英語翻訳における高雅化を探った。紙面の都合上、言及を避けたが現在、聡子付きの女中蓼科に関する表現の収集を進めている。蓼科の場合、残酷で辛辣な表現が緩和されて高雅化されている。その結果については稿を改めて考察したい。

辞書類

佐藤信夫(編)(2006)『レトリック辞典』大修館書店
増田剛(編)(2013)『新英和大辞典』研究社
南出康世(編)(2001)『ジーニアス大辞典第三版』
北原保雄(編)(2011)『明鏡国語辞典第二版』 大修館書店
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編)(2000-2002)『日本国語大辞典』
Addison.W.L(2013)Longman Language Activator.Longman
Oxford English Dictionary(http://www.oed.com.)
『デジタル大辞泉』

引用文献

川端康成(1992)『雪国』新潮社（出版年は、1957 年）

Kawabata.Y.(1983).Snow Country.Seidensticker,E.(Trans.)Tokyo:Tuttle Company,(Originalwork pubilished 1957)

三島由紀夫(2012).『春の雪』新潮社 (出版年は 1969 年)

Mishima,Y.(1990).Spring Snow. Gallagher, M. (Trans.).New York:Alfred A Knopf,Inc. (Original work published 1972).

三島由紀夫(2006)『絹と明察』新潮社 (出版年は 1964 年)

Mishima,Y.(1988).Gibney, F.(Ed.) Silk and Insight: A Novel.M.E.Sharpe.Sato,H(Trans)Frank Gibney(Ed.)NewYork, An East Gate Book

三島由紀夫（1996）『金閣寺』新潮社(出版年は 1956 年)

Mishima,Y.(1994).The Temple of the Golden Pavilion.(I, Morris, Trans)Rutland,Vermont,Tokyo, Charles E. Tuttle Company (Original work published in 1956)

参考文献

Berman,A.(1985/2000).Translation and the traials of the foreign, trans.Lawrence Venuti.In The Translating Studies Reader,ed. Lawrence Venuti,285-97.London:Routledge

Fowler,E.(1992).Rendering words, traversing cultures: On the art and politics of translating modern Japanese fiction. Jorurnal of Japanese Studies 18(1):144

Hasegawa,Y.(2012).The Routledge Course in Japanese Translation. London. New York.:Routledge

Keene, D. (1972).Mishima's Monument to a Distant Japan, The Saturday Review,pp.57-59.(June. 10,1972).

Larry,W.(2015).Unbinding the Japanese Novel in English Translation, The Alfred A. Knopf Program, 1955-1977.Department of Modern Languages Faculty of Arts University of Helsinki.

Ryan, M.(1974). "The Mishima Tetralogy"(Review) Journal of Japanese Studies 1(1):65-173.

Miller,R.(1986).Nihongo: In Defence of Japanese, London: Athlone Press.

Newmark, P.(1982/1988).Approaches to Translation. New York: Pentice Hall

Nida,E(1964).Toward a Science of Translating.New York: Prentice Hall

Morris, I.(1958).Personal correspondence to Harold Strauss. 7 July 1955. ---. In Larry, W (2005) Unbinding the Japanese Novel in English

Venuti,L.(1998).The Scandals of Translation:Towards an ethics of difference, London and New York:Routledge. Vinay, J. -P. & Darbelent, J.(1958/1995). Comparative Stylistics of French and English. A Methodology for Translation, Juan Sager and M.J.Hamel.AmsterdamJohn Benjamins L.Venuti, in (Ed.) The Translation Studies Reader 3rd ed.pp.84-93

Vinay,J.-P.& Darbelnet,J.(1995).Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation,Sager,J.C and Hamel,M.J.(Ed. and Trans.)Amsterdam&Philadelphia : John Benjamins Publishing Company.(Original work published 1958).

エカテリーナ,グトワ(2010)「三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳について」『現代文芸論研究室れにくさ』(2) pp.129-147

キーン・ドナルド(2012)『ドナルド・キーン著作集 4 巻思い出の作家たち』新潮社

佐藤紘彰(1996)『訳せないもの』サイマル出版会

寺浦麻由(2020a)『豊饒の海』『春の雪』の英語翻訳−百人一首 48 番 49 番の訳出について−』『大阪大学言語文化学』pp.57-7.大阪大学言語文化学会

寺浦麻由(2020b)「英訳版「春の雪」における表面下の意味ネットワークの破壊−「藻」の表象を中心に−」『言語文化研究』印刷中

瀬戸賢一 (2002)『日本語のレトリック文章表現の技法』岩波書店

ベスター,ジョン(1990)「没後 20 年三島由紀夫特集翻訳者の立場から」『新潮』87,(12), pp.239-242 新潮社

ベルマン, A.(1984/2008)『他者という試練:ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一・訳) みすず書房

前田尚作(2006)『日本文学英訳分析セミナー』昭和堂

画像引用元

https://ja.wikipedia.org/wiki/レダと白鳥(2020 年 3 月 20 日閲覧)